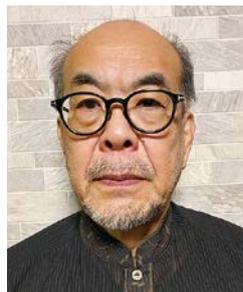


首里城復元について

沖繩支部長 上原 俊次（昭和52年・建築）



首里城は2019年10月31日午前2時半頃に正殿から出火し、計7棟全焼、2棟の一部を延焼し、漆器などの収蔵品391点も焼失した。

筆者自宅が首里城に近く、夜中に尋常ならざる消防のサイレンで飛び起き、妻と共に火災現場の近くまで行き、火力が強く白く燃え盛る光景を見て言葉を失い、ただ呆然とした事をまだ昨日の事のように鮮明に覚えております。

消防車は那覇市が59台、近隣市町村の応援が15台、合計74台出動したが、鎮火まで11時間を要した。火災の原因は特定出来なかったとされている。

嘗て首里城は琉球王国中山城として那覇港を見下ろす丘陵地にあり、明や清を始めとする近隣諸国との貿易を行う司令塔としての役割を果たしていた。正殿、北殿、番所、南殿、黄金御殿、二階御殿、寄満、書院、御庭などから構成されており、現在は国営沖繩記念公園首里城地区として整備途中であり、有料区域内は国営公園として、その周辺は県営公園として運営されている。

首里城跡、具体的には地下の遺構である基壇（建築物の基礎にあたる）とその他8カ所の史跡を併せて2000年に世界遺産に登録され、国指定史跡の文化財でもある。そのため、1992年に沖繩復帰20年記念事業で復元された正殿や北殿などの首里城建物群は文化財ではなく、消防法でもスプリンクラー設置の義務付けがなかったようである。

1500年頃に創建された正殿は木造の三階建てで、主に国王の政治や国王と親族・女官らが儀式を執り行う場であり、ほぼ同位置で数度の焼失・復元を繰り返して、沖繩戦で焼失するまで残っていた正殿をモデルに復元されております。

建築様式は、中国の宮廷建築と日本の建築様式を基本にして琉球独特の意匠にまとめられ、正面の石階段の両脇に大龍柱の彫刻があり、その他柱や梁等にも龍の彫刻が多数施されていた。龍は国王の象徴であり、たくさんの龍が首里城には棲ん

でいた。中国の影響がとても大きいと思われる。北殿の創建は1520年頃とされ、通常は王府の行政施設として機能し、復元は鉄筋コンクリート造、外観木造となっている。

南殿の創建は1620年頃とされ、通常は首里城へ登城してきた人々の取次を行う場所であり、日本風の儀式が行われた所です。元々日本的な建築で作られており塗装はされていない。復元後は、首里城正殿内への入口として、また琉球王国ゆかりの美術工芸品等を展示スペースとして利用されている。

黄金御殿は、国王や王妃・王母のプライベートゾーンで、建物は二階部分で正殿・二階御殿・近習詰所と繋がっていた。寄満は黄金御殿につながった東西に細長い建物で国王とその家族の食事を準備した台所です。

このように首里城建物群は渡り廊下等で繋がった施設が多く火災ともなると延焼は避けられないものだった。今回の復元計画では新たな防火対策等が盛り込まれているものと推察する。

復元に関する国及び県の動きは迅速で、火災の2か月後には県が「首里城復興の基本的な考え方」を発表、その後基本方針、基本計画と進み、国は2020年3月に「首里城正殿等の復元に向けた工程表」を関係閣僚で閣議決定し、その後「技術検討委員会」を設置して今に至っています。

2022年11月着工から首里城復元工事は順調に進んでおり、昨年の3月には建築工学科同期の北村啓君が沖繩旅行で訪ねてきて、一緒に首里城の復元状況を見学する事ができ、工事の状況が見学できるシステムは大変良い事だと感じた。

首里城のシンボルである赤瓦6万枚も地元企業が奮闘して作り終え、焼失7年後の今年秋頃には完成予定です。皆さんも機会があれば復元した首里城を是非ご覧ください。